附録　序

是先師以寛政丁巳之春、所賜余之手書、事状詳悉、蓋儼然一編米澤紀行矣、書到之初、柳川致仕大夫今村子共適訪余廬、余出示之、子共觀而大喜、感称不已、遂請數日之借袖歸、子共好善、蓋寫而傳之于人、厥後寫々相承、數年間、我四隣侯國之讀書好道者、往々皆傳之云、先師没云今十有七年、而此書則二十有一年、嗚乎舊矣、先師賜書余家甚多、而此牘尤深感入、謹裝以貽之于子孫。

文化十四年冬十一月

樺公禮　拜

附録　序【書き下し文】

是れ先師、寛政丁巳の春を以て、余に賜はる所の手書なり。事状詳悉。蓋し儼然として一編の米沢紀行なり。書到るの初め、柳川致仕大夫今村子共、適たま余の廬を訪ふ。余出てこれを示す。子共観て大ひに喜び、感称して已まず。遂に数日の借袖を請ひて帰る。子共善を好む。蓋し写してこれを人に傳へん。厥の後写々相承はること数年間、我四隣侯国の書を読み、道を好む者は、往々皆これを傳ふると云ふ。先師没し去りて、今十有七年。而して此書則ち二十有一年。嗚乎、旧なるかな。先師書を余の家に賜はること甚だ多し。而して此牘尤も深く人を感ず。謹装して以て子孫に貽す。

文化十四年冬十一月　樺公禮拝

附録のはじめに

これは、今は亡き細井平洲先生が、寛政九年（一七九七年・平洲先生七十歳）の春に、わたしに送っていただいた手紙である。事実や状況がことごとくくわしく書かれていて、思うにこれは、おごそかな一編の米沢紀行である。この手紙が届いたとき、梁川藩を隠居した今村子共が、ちょうどわが家を訪ねて来たところであった。そこでわたしは、この手紙を見せた。彼はこの手紙を見てたいへん喜び、感動して称賛することをやめなかった。ついに数日の借用を願い、ふところに入れて持って帰っていった。子共は善なることを好む。たぶん書き写して、これを人に伝えるのであろう。その後、手紙を書き写したいという依頼を受けること数年間、わたしの国の周囲の国で、書を読み、道を好む者は皆これを伝えていったという。

平洲先生が亡くなられて今年で十七年がたつ。そしてこの手紙が届いてから二十一年になる。ああ、昔になってしまったことよ。

平洲先生は私の家に手紙を下さることも多かった。しかしこの手紙こそ、最も深く平洲先生の人柄を感じさせるものである。謹んで表装をしてこれを子孫に残すものである。

文化十四年（一八一七年）冬十一月

樺島公禮（かばしまこうれい）（世儀（せいぎ）・石梁（せきりょう））　拜す

附録

新年恭喜猶甚寒候得共、御揃弥御安福二殊更今春ハ令女孩笑、御交々目出度御迎陽可被成と、重畳目出度奉存候。

小館中老少無恙致加年候、御安意可被下候。

一、去年追々御詩書、節々無滞致拝見大キ尓慰遠念申候。貴校も追々御造立落成之由、賢勞二ハ候得共、扨々恭悦之御事御本望之趣致遠察候而、於愚老も大慶不過之候。

附録

新年つつしんでお喜び申しあげます。まだ、ひどく寒いですが、皆様お揃いで、安らかに幸せに、とりわけこの春は、お子さんの笑いもあり、それぞれ、おめでたく新年をお迎えなさることを、このうえもなくおめでたく存じ上げます。

当方も、みな、なにごともなくひとつ年をかさねました。御安心ください。

一、去年、次々といただきました詩は、その折おりに拝見いたしました。とてもいい、慰みになり、遠く離れたところにいるあなたに思いを寄せました。藩校も再建されたとのこと、御苦労なことではありましたが、なんとまあ、うれしいことで、望みを達成されたお喜びを、お察しいたします。わたしにとりましても、こんなにうれしいことはありません。

近年列国追々校舎取立テも相聞候。其内半ハ愚老常々参り候諸侯家造立之功も追々致与聞候而、本望之事二存候。

貴邦ハ猶更足下御取立の事、心底致喜悦候。此上勤学之主法等無御油斷御心掛被成候様二と存候。兎角急二ハ不参事二候間、永久之所ヲ専二御議シ被成度御事二存候。

近年、諸国で、つぎつぎと藩校が設立されているときます。そのうちの半分ほどは、わたくしが講義にうかがっております諸家の設立による功績と聞いておりまして、望みを達成して満足しています。

あなたの久留米藩は、そのうえに、あなたを教授にされたとのこと、心の底からうれしく思います。このうえは、学びに努め励む方法などの注意をおこたることなく心がけられることです。とにかく、急にできることではありませんので、将来を見すえた議論をしていくようにしたいものです。

一、愚老去八月廿五日、東都致発足候。此行ハ偏
二米澤今侯、老侯への孝心より事起り、久々御面
談も不申、老侯常々遥念不已候付、今侯其
所ヲ甚労念有之候而、急度市谷へ願達有
之候付、市谷ニても甚孝心ヲ感心被致候故ニ、
乍大儀下向候様ニ被申渡、日限之儀も彼地の用
事相濟候迄ハ心次第ニ逗留致候様尓と、細々
被申含、

一、わたしは、昨年の八月二十五日に江戸を旅立ちました。この旅立ちは、まったく、米沢藩主上杉治広公の、父親鷹山公に対する親孝行から生じたことです。長い間、鷹山公がわたくしと会うことがなくて、いつもいつも会いたいと思っておられることを、治広公が気にかけておられて、このたび、尾張藩に、わたくしの米沢招待を願い出られました。

尾張侯におきましても、この親孝行に感心されて、それをかなえるために、わたしに、御苦労なことではあるが、米沢へ出かけるようにと申し渡されました。期間も、米沢での要件が終わるまで、こころゆくまで滞在してきてくださいと、こまごまはなしがありました。

元来生涯二今一度老侯へ對面い多し度本心、下　悃　尓相叶候付、七十老ヲ忘レ、百里之旅行も存立候事二候。途中介抱之為二、服部吉弥ヲ被添、日々の取計ひハ内田吉左衛門と申、勝手方之老吏壱人、行旅の事ヲ司里、轎夫共迄、謹慎之者ヲ撰ミ尓て、愚老ハ門生上田雄次郎、菱刈卯三郎両人、介抱二同道、随身之家来ハ那須良助、鍵持草履取両人、其餘の持人雑人、何レも彼家之謹直者計ヲ被附候付、

もともと、生涯に今一度鷹山公にお会いしたいというのが本心でしたのですが、その思いにかない、七十歳の老人であることを忘れて、百里もへだたった米沢への旅行を思い立ちました。旅中の世話人として、服部吉弥がつけられ、日々の庶務は、内田吉左衛門という財政担当の老役人一人がつけられまして、旅程のことを担当し、駕籠かきにいたるまで、慎み深い者を選んでくださいました。わたしは、嚶鳴館塾生の上田雄次郎（伊予西条藩士）、菱刈卯三郎（肥後人吉藩士）の二人を、世話人として同行させました。これに付き添う家来は、那須良助で、槍持ち、草履取りの二人、そのほかの下働きの者、全員、上杉家のつつしみ深く、正直でまじめな者だけをつけてくださいましたので、

扨々道中も賑々敷、自基之堂之態、吟咏歌笑、樂敷事ニ御座候。両生之内も、上田ハ東都人尓て、山野之風景ニ逢候へハ、躍り候而日々勞ヲ忘レ申候。日光之左右ハ元来足下歴遊之地、所々尓て御噂ヲ申、此所同携不致事ヲ恨ミ申候。

刀称川以東駅々尓ても、逆旅主人往々志有之者も御座候而、米澤聖君様の御師匠様と申唱へ、逢ニ罷出し者も多く、霄ニ参り、又朝ニ夜ヲ込メテ、途中迄礼服にて送り候者も有之候。

さてさて、道中はにぎやかで、これは、もともと大勢のことで、詩を吟じ、歌をうたい、笑い合い、楽しいことでした。

上田と菱刈の二人うち、上田は、江戸生まれの江戸育ちなので、山や野原の風景に出会うと、躍りあがってよろこび、日々の疲れを忘れております。日光の周辺は、もともと、あなたが巡り歩かれたところで、ところどころであなたのことを噂しました。同行できなかったことを、残念に思いました。

利根川から東の宿場、宿場においても、旅館の主人に、しばしばこころざしをいだく人がいて、「米沢聖君様（鷹山公）のお師匠様がおこしになった」といって、会いにくるものも多くいました。夕方やってきたり、また、朝に夜にとやってきました。途中まで礼服で見送ってくれた人もいました。

依之米澤侯之徳、隣国ニ布キ申候様子共致感心候。

十一日振之旅行、九月五日ニ南境板谷関ニ至リ候所、國校之督学　提学近来督学ニ被改候　神保行簡前日より罷出、以命勞し申候。其餘吏人も多く差出し被置候。

翌六日ニ嶺ヲ下リ、府城より三里大沢と申驛ニ至り候所、老侯親敷郊迎之沙汰相聞候付、急ギ候而八ツ過ニ羽黒堂と申地ニ至り申候。此所ハ南郊一里五六丁も府城ヲ距リ申所ニ候。

このことによって、米沢侯（鷹山公）の徳が、隣国にまでしれわたっていることに感心しました。

旅も十一日目の九月五日に（米沢藩領）南境の板谷関に着きましたところ、藩校の督学―提学を近ごろ督学と改められた―神保行簡が、命令を受けて前日よりでかけてきており、世話をしてくれました。そのほかの役人も多く配置されておりました。

翌日の六日に峰を下り、お城　より三里（およそ十二キロ）の大沢という宿につきましたところ、鷹山公（老侯）がみずから出迎えにきておられると聞きましたので、いそぎまして、八ツ過ぎ（午後二時すぎ）に羽黒堂というところに着きました。ここは。お城から一里五六丁（およそ六キロ）ほど南のところです。

最早侯の儀衛遥二相見候付、五六丁轎ヲ下リ歩ミ申候所、普門院と申寺の門前二、両傍二雲従俯伏、侯は路の中心に立て被相待候。

進而拝し申候所、愚情ハ地二手志て拝度存候得共、侯の態度左候ハヽ、地二手して答拝可有之様子故二、無是非、足跗二手志して拝し申候。

もうすでに、鷹山公の行列が遠くに見えました。五六丁（およそ六百メートル）手前のところで駕籠をおりて、歩んで行きましたところ、普門院という寺の門前の両側に、家来が雲のごとくつきしたがって、うつむいて伏しており、鷹山公は道のまんなかに立って待っておられました。進み寄ってお辞儀をしました。わたし自身の思いは、地面に手をついてお辞儀をしたかったのですが、そうすると、鷹山公のようすからみて、同じように地面に手をついて返礼されるようでしたので、やむをえず、足のところまで手をさげてお辞儀しました。

先何之言もなく、老涙満顔ニ御座候。侯も一向無言尓て涙満面、先生御安泰と計尓て、御案内可申とて、寺門ニ被入候。外門より中門迄、足指仰キ申候。三丁計の坂ニ御座候。聯歩ニシテ進ミ申候。中々一歩も前行ハ無之候。杖ヲ被進メ候得共、辞志て不杖候間、若やつまつきも可致哉との心遣と相見え、手ヲ引ヌ計ニ比肩志て被進候。

堂ニ上り候節、御案内と被申候て階ヲ上り、堂板ニ座し、俯伏して被待候。

なんのことばもでず、ただ涙がながれました。鷹山公もまったく無言で、顔中涙。「先生、ようこそ御無事で。御案内いたします」といわれて、お寺の外門に入られました。外門より中門まで、ずっと足先を手で指し示して案内されました。三丁（およそ三百メートル）ばかりの坂道でした。連れ添って歩んでいかれました。一歩も前に出られることなく、よりそって歩かれました。杖をすすめられましたが、辞退しましたので、もしや、つまづかれてもいけないとの心遣いから、手を引かんばかりに肩をならべてつきそわれました。

本堂に入りますときに、「御案内」といわれて、段をあがられて、その板の上にすわって、うつむきふして待たれました。

夫より座ニ上り候時、是ハ例御存知之通、辞
譲久敷候而、漸對座ニ相成、ソロソロ言も
出テ候而御互ニ及言語申候。杯進ミ候而例の
通進シ申候而、献酬も相済候。

國老荏戸六郎兵衛　九郎兵衛事改名　ハ、今侯の
命を以同敷是迄郊迎、勿論整儀候而礼容深切
ニ候。扨駿河守殿其外諸公子よりも、名代の使
者皆礼服ニて是迄罷出候。

それから、座敷に入りますときに、これはいつもの、あなたもよく御存知のとおり、へりくだってお譲りになりましたので、譲り合いつつ、やっと向かい合って席に着くことができました。それから、そろそろと会話もはじまりました。さかづきごともすすみまして、いつものようにお酒をすすめられまして、さかづきのやりとりもいたしました。国家老の荏戸六郎兵衛―九郎兵衛を改名しました―は、今の藩主の治広公〔江戸在府中〕の命令によって、藩主の名代として、鷹山公と同じように行列を整えて礼儀正しく、心をこめて迎えてくれました。駿河守殿（上杉勝定公。鷹山公の義弟。重定公の五男）とそのほかの公子からも、名代の使者が、礼服で迎えてくれました。

大老侯ハ其節丹泉ニ入湯ニ付、附の家老一人使者ニ被差出候。

今日近傍の村民無老少、田畔ニ伏シテ儀ヲ観申候者、嗚呼の聲計にて皆々落涙飲泣能の聲啾々と聞え候得ハ、侯の徳、民心ニ感戴之所ハ、是尓て相知レ申候。於是愚老なる者、豈可不泣乎、豈可不泣乎。

大老侯（鷹山の父で、先々代藩主の重定公）は、そのとき、赤湯温泉で湯治のため、附家老の一人が迎えの使者としてこられました。

きょうは、近在の村人が、老いも若きもみな田のあぜに伏して、このことを見ておりまして、「ああ」という声のみで、みなみな涙を流し、忍びなく声がしくしくときこえてきました。鷹山公の徳が、領民の心にありがたくおしいただかれていることが、このことによってわかりました。いまわたしが、ここにいて、どうして泣かないことがありましょう。どうして泣かないことがありましょう。

一、御案内可申とて老侯発駕、直ニ引續キ尾志て府城に入り申候。都城之民満途、老侯の儀衛を拝観し、並ニ愚老ヲ見申候而是又嗚呼之聲不斷耳候。旅館ハ三ノ丸内老侯隠館より三丁計も有之候。奥山良助と申侍、近比家作ヲ致直し屋敷も手廣く家も其調ひ申候宅ニ御座候。此人願出候而愚老逗留中之旅館ニ被抑付度、甚殊勝に被存右屋敷ヲ明渡し旅館に被定候。

一、「御案内」いたしますと、鷹山公が出発されました。すぐにひきつづいて城下にはいりました。城下の人びとは、道に満ちあふれて、鷹山公の行列を拝観し、そのあとに続く、わたしを見ました、また、「ああ」の声が耳からはなれませんでした。旅館は、三ノ丸内の鷹山公の隠居屋敷から三丁ほど離れたところでした。

奥山良助という家臣が、最近、家を修築して、屋敷も広くて、調った家でした。この人が、願い出て、わたしの米沢滞在中の宿舎としてほしいとのことでした。とても、感心なことである、ということで、この屋敷が宿舎に定められました。

愚老衰年泉水を好ミ申候段被聞及候而、新二右庭中二泉池ヲ被築、流水潺湲中々をも志ろく候。但し日々多忙、右庭中へ下り致逍遥候事ハ只一度ニて御座候。

一、館ニ至り候前より國老中条豊前、竹俣兵庫以下之長有司皆々礼衣厳然待迎へ候而、慰労無所不至候。諸公館より着之悦之使者不斷門候。其夜ハ半ハ甚労し申候いき。

わたしが年をとってから、庭の池を好むようになったことを聞き及ばれて、あたらしくその庭に池を築かれました。さらさらと流れる水がおもしろい池です。ただし、毎日多忙なことで、この庭に降りて散歩できたのは、たった一回だけでした。

一、宿舎に着く前に、国家老の中条豊前、竹俣兵庫以下の役職の者が、全員礼服に身を整えて宿舎でおごそかに迎えてくれました。苦労をねぎらうことが、すべてに行きわたっておりました。諸役所からも到着の喜びの使者が、あとを絶ちませんでした。その夜は夜中まで、本当に疲れました。

一、翌朝改て、老侯より使者を以被勞、竝ニ請し被申候付、四時ニ隠館へ罷出候所、門ニ見次キ之者両人相侍、愚老旅館ヲ發し申候相図ヲ報し申候而、愚老門ニ入候得ハ附之用人両三人、玄関式臺ニ出迎ひ、取次ハ下座ニ待申候。入座敷候得ハ老侯麻上下、外宮三ノ間迄御出迎尓て、御自身前導有之、直ニ奥座之間へ案内尓て賓主ヲ分ケ、例之對座にて、先々笑泣談ニ及ひ、夫より料理出候而、馳走無所不至候、炙は御自身被引候。

一、翌朝、改めて、鷹山公から使者をもって、慰労され、あわせて、お招きをうけましたので、四ツ時（午前十時）に隠居屋敷へ出かけましたところ、門のところに見張りの者が二人おりまして、わたしが宿舎を出ますと、その合図をしまして、わたしが隠居屋敷の門に入りますと、御附きの用人二三人が、玄関の式台で出迎え、取次の者は下座で待ち受けました。座敷に入りますと、鷹山公は麻上下の礼服で、表の三ノ間まで出迎えられて、御自身で奥の間へ案内され、招かれた者と招いた者の区分をはっきりとして、いつものような対座となりました。まずまず、笑い、泣くはなしとなり、料理も出され、その御馳走はなにひとつかけるものはありませんでした。あぶり物は、御自身で焼いてくださいました。

例之通、杯ヲ遣シ申候而、諸有司奔走、八ツ過迄飲宴、夫より左右ヲ退ケ、精密之言談に及、國事共先々荒増質問有之、学談ニ及、今日ハ勞シ可申とて、七ツ比に致退出候。送迎如常、痛入候事共ニ御座候。

歸館後直ニ以使者、仍几一ツ、蒲席一ツ、小杯一ツ被贈候。命ニ御老年之儀、勞疲を甚恐レ申候間、此几ニより此席ニ座し、誰ニ逢候共、必々席ヲ離レ、几ヲ退ケ等之儀ハ、決而無御座様ニとの儀、

いつものように、お酒を酌み交わしました。諸役人は忙しく走り回り、八ツ過ぎ（午後二時過ぎ）まで酒宴。それから、まわりの者をしりぞけて、二人だけで詳細な話になり、国政についてのおおかたの質問がありまして、学問についての話になりました。「きょうは、御面倒をおかけしました」ということで、七ツころ（午後四時ころ）にしりぞいて、帰りました。その送迎は、いつものとおり御丁寧で、恐縮しました。

宿舎に帰りますと、すぐに、使者がきまして、几一つ、蒲の葉で編んだ敷物一つ、小さめのさかづき一つが贈り届けられました。その思いは、わたしが老年であることから、疲れることを、大変心配されてのことで、この几にすわって、誰がたずねてきても、必ず必ず、この几からはなれたり、しりぞいたりは、決してなさらないようにとのこと。

杯ハ近年小杯ヲ御好ミの由、是尓て心儘ニ御用候様ニ、几ハ高低心ニ叶ひ不申候ハヽ、又々可申付候、蒲席ハ國産之蒲尓て、新ニ柔ニ織セ置候由、養老之意無所不盡。又命に此度御下向ニ付、老臣共初メ皆々日々罷出候、起居可申候。先生より御出之儀は決而御無用、此段兼々老臣共へも申付、其外家臣一統ニ右之段申渡置候。

さかづきは、近年こぶりのものを好んでおられるとのこと、どうぞこのこぶりのさかづきをお使いくださるようにとのこと。几は、高さがあわないようでしたら、申しつけてくださいとのこと。蒲の敷物は、国産の蒲の葉を使って、新しく織らせたとのこと。老人をいたわり世話をすることに、心をつくさないことがらは、なにひとつありません。また、命令として、このたびのわたしの米沢滞在については、老臣どもをはじめとして、皆の者が、日々訪問して生活をするようにとのこと。わたしから出かけて行くようなことは、絶対にないようにとのこと、このことも以前から老臣どもにも申しつけられ、そのほか、家臣一同にも、これらのことを申し渡されたとのこと。

大老侯の宮、諸公子へも同様、是ハ此方より日限ヲトし、御請し可申との儀、其内二三老臣も参り、安否ヲ問ひ、夫より廿年の心事ヲ談し、元来弟子之儀に候得ハ、無残處愛敬、老侯よりの被仰渡之通り二、私宅等へ為挨拶罷出候事ハ、必々斷二及申候由。皆々申聞二候。依之逗留中、三老臣及其餘之大臣より、一統二日々來問ヲ請ケ候計尓て、愚老ハ一向不参候。發足前二飲宴と申候而、三老へ一夜宛咄し二参り、歓ヲ盡し申候。

大老侯の重定公の御屋敷にも、諸公子にも同じように、この方々には、わたしのほうから、日時を定めて、招きを受けられるようにとのこと。

そのうちに、二三の老臣もやってきて、安否をたずねあい、それから二十年来の思いを語りあった。もともと弟子なので、新愛と尊敬の念のみです。鷹山公から、わたしが、私宅へ挨拶のためにでかけることは、一切お断わりにすると、全員に申し渡された。そのため、滞在中に三家老およびそのほかの大臣から、毎日訪問を受けるばかりで、わたしは、まったく出かけませんでした。米沢を発つ前に、酒宴といって、三人に老臣のところへ、一晩だけはなしにでかけまして、喜びをつくしました。

大老侯の宮へも両日被請候而、参謁、大老侯七十七、涙ヲ垂レテ御悦二候。盡日馳走無残所候。

三公子　當侯の弟駿河守殿相模殿遠江殿　是も追々來問、自是ハ不参、立前二一度宛参り馳走二逢申候。

一、中條豊前、竹俣兵庫、荏戸六郎兵衛三老ハ、一日二二度ハ参り候。一度不参日も無之、夜ハ四ツ九ツ迄、飲宴交歓樂敷事二御座候。其餘新旧相知之諸有司、諸学生、日々來問、是又同斷樂敷候。

大老侯（重定公）のお屋敷へも、二日間、請われて参上いたしました。大老侯は七十七歳におなりで、涙を流してお喜びになられました。終日、おもてなしをうけました。

今の藩主の三人の弟君（駿河守殿→鷹山公の義弟勝定・重定公の五男、相模殿→鷹山公の義弟勝熙・重定公の長男、遠江殿→鷹山公の義弟信政・重定公の四男）も、追々お越しくださいました。こちらからは、お訪ねしませんでした。出発前に一度づつお訪ねしまして、おもてなしをうけました。

一、中条豊前、竹俣兵庫、荏戸六郎兵衛の三家老は、一日に二回はやってきました。一回も来ない日はなくて、夜は、四ツ（午後十時）、九ツ（午前零時）までも、酒宴でうちとけて楽しいことでした。そのほか、新旧のしりあいの諸役人、諸学生が、日々やってきまして、これまた、本当に楽しいことでした。

一、学館へハ着之翌々日、聖堂へ拝謁、諸学生と飲宴交歓致し候。一月二六日、二七ノ日終日罷出、昼前ハ大學ヲ講し、晝後ハ詩文又ハ學事ヲ談し申候。前學生、当學生數十人囲饒い多し悦申候。

一、藩校興譲館へは、到着の翌々日に聖堂を拝謁し、諸学生と酒宴でうちとけて楽しみました。一月二十六日、二十七日に終日藩校へでかけまして、午前中は、『大学』を講義し、午後は詩文または学問について話しました。以前の学生や現在の学生数十人が、わたしを取り囲みまして、うれしかったです。

右之外ニ町家ノ者願ひ出、両日講談四百人計　頭分計　町奉行持而出申候。不相替皆々落涙疊ヲ濕し申候。勿論例之通愚老も泣キ申候いき。學館へ出席ノ日ハ老臣諸大臣も不残出席、學生何レも上達、志業風ヲ成シ、見事之様子ニ御座候而、扨々樂敷事ニ候。上田、菱刈両生、諸學生と交歓、日々悦申候。此段餘り長く相成候付、略し申候。餘ハ御想像可被成候。

これらのほかに、町家（商人ら）の者からの願い出によって、二日間四百人あまり――指導的な立場の人――に講談をしました。町奉行も出席しました。いつもと同じように、みんなが感動の涙を流しましたので、涙でたたみがぬれました。もちろん、わたしも、いつものように、涙をながして、講談をしました。興譲館へ出席の日は、老臣、諸重役も全員出席されました。学生も学問がよく身につき、学業、事業への志に満ちており、その見事なようすは、なんとまあ、楽しいことでした。上田、菱刈の二人は、諸学生と交流して、毎日喜んでおりました。これらのことにつきましては、語れば、あまりに長くなってしまいますので、略します。いろいろ、御想像ください。

一、老侯之宮へハ毎日晝過より参上　仕、夜ハ早キ可五ツ遅キハ四ツ過ニ歸館致候。時々三老も交り、何是例之國事に及申候。老侯朝四ツ時より昼過迄ハ大老侯伺ひニ御出、一日も怠り無候、其間四丁程有之候。日々之伺ひ陰晴風雨疾風迅雷、決而不参無之候。扨も扨も至孝の性萬民感戴先ツ是可第一ノ君徳ニ御座候。大老侯も一日も老侯を不被見候得者不樂候。

一、鷹山公のお屋敷へは、毎日昼過ぎに訪問し、夜は早い時で五ツ（午後八時）、遅い時は四ツ（午後十時）過ぎに、帰りました。ときどき、三家老も同席して、あれこれ国政について話しました。鷹山公は、朝四ツ（午前十時）より、昼過ぎまで、大老侯（父親の重定公）のところへ出かけられまして、一日も怠ることはありません。その間は、四丁（およそ四百メートル）ほどです。毎日の訪問は、曇りも晴れも、風でも雨でも、激しい風と激しい雷の急な変化のときも、決して取りやめることはありません。まったく、このうえもない孝行で、すべての人がありがたく、おしいただき、なによりも、これが第一の君主としてのすぐれた人柄でございます。大老侯（重定公）も、一日でも鷹山公と会わなければ、楽しくないことです。

仍之諸公子も同断、孝心感服致候。老侯宮二テハ日々孝経を講申候。附キ之有司一統不及申、三公子も日々参会被聞講候。

就中感心之儀者、当主之養子世子宮松殿、今年八歳、甚怜悧ニ御座候。老侯宮中ニテ成育有之候。起居動静言々行々、全く老侯の徳度ヲ見聞有之、御祖父様より外ニ難有人ハ無之と被存候由尓て、いや者や驚入候。日々講ヲ被聴候得共倦怠之容色一ツも無之候。

このようなわけで、諸公子も同じように訪問されており、孝行な心に感心いたします。

鷹山公の御屋敷では、毎日『孝経』を講義しました。御付きの役人一同はいうにおよばず、三公子も毎日参加されて、講義を受けられました。とりわけ感心した方は、藩主の養子で世子の宮松殿〔鷹山公の義弟勝熙公の子で藩主治広公の養子〕です。今年八歳で、たいへん利発な子です。鷹山公のところで、育てられています。立ち居振る舞いのようす、言うこと為すことすべて鷹山公の品性を、見聞きして、この鷹山おじいさまよりほかには、尊い人はないと思っておられるようで、いやはや、驚きました。毎日講義を聞かれても、飽きたというようなお顔は一切されません。

御祖父様同様(どうよう)二其位(そのくらい)二座し、威儀容度(いぎようどげんぜんみるべき)儼然可見事(こと)二御座候。

老侯之愛育教誨(きょうかい)ハ勿論(もちろん)、天性不及(てんせいもうすにおよばず)申候。直丸殿御事(おんこと)ヲ内心(ないしん)二存出(ぞんじだ)し含涙(がんるいそうら)候ひ起(き)。御遠察(ごえんさつならるべく)可被成候。老侯の徳ハとても筆紙(ひっし)二不盡(つきず)候。仍之(これによりてりゃく)略し申候(もうしそうろう)。

鷹山おじいさまと同じところに座られ、立ち居振る舞い、顔つきがおごそかで、見どころのある方でございます。

鷹山公の教えはもちろん、天性のものであることはいうまでもありません。直丸殿（鷹山公の幼名）を教えているときのことを思い出し、涙ぐみました。御推察ください。鷹山公の徳は、とても書き尽くすことはできません。このようなわけで、略します。

一、領内之美事不遑枚擧候、孝悌力田風ヲ成し、有司ハ安然として慰勞スルノミニ御座候。此儀は、上田菱刈見聞泣キ申候計ニ御座候。生育の世話も行届キ、今ハ一民も子ヲ不育者無之候。不思儀之事ニ候。歸府之上、市谷ニて此事ヲ申述候得ハ、是計尓ても明君なり、大功哉大功哉と称美被致候。甚三郎も嘸嬉敷存し候ひつらんと悦被申候。

一、領内のほめるべきことは、あまりに多すぎて数えあげることができません。父母に孝行で、目上の人によくしたがい、農業に力をつくす風潮ができあがり、役人は、やすらかにして、苦労をねぎらうだけでございます。このようすは、上田、菱刈も見聞きして、泣きそうになっておりました。子育ての世話も行き届いておりまして、今では、食べることができないことから子育てができないという者は誰もおりません。不思議なことです。江戸へ帰りましてから、尾張藩主にこのことを申しあげましたら、「そのことだけでも賢明な君主だ。大きな功績だ、大きな功績だ」と、ほめたたえられました。「甚三郎（平洲の通称）も、さぞかしうれしいことであろう」と、喜び申されました。

一、泉氏之婦病歿之儀、早速早便ニテ被告候。愚老ハとても覚悟、已ニ八月末ニハ参り候而、永訣い多し候得ハ、別而痛心も不致候。乍併老侯ヲ初、老臣以下一統之悲哀ニテ、扨々却而哀を添へ申候いき、老侯は赴ヲ被聞候と、直に哭泣、先生之心中如何計と能ミ被申候而、左右従臣も是を甚愁へ申候。別而竹俣、莅戸両人ハ参り吊シ候而、愚老よりハ甚之落涙、其餘の深交諸子勿論、いや者や迷惑い多し候。

一、泉氏（嚶鳴館の門人で塾長も務めた）の嫁（平洲の娘、みほ）が病気で亡くなったことについては、さっそく、早便で知らせが届きました。わたしは、覚悟をしておりまして、しでに八月末に見舞いにいきまして、永遠の別れをしてきましたので、特に心を痛め悩ますことはありませんでした。しかしながら、鷹山公をはじめ、老臣以下一同の悲しみとあわれみに、かえって、悲しみを増しました。鷹山公は、知らせを聞かれたとたん、大声をあげて泣かれ、「先生の心中はどれほどか」とだけ申されまして、御傍近くに仕える家臣も、とても心配をされました。ことさら、竹俣、莅戸の二人は、やってきて悔やみを述べられ、わたしより、はなはなだしく涙を流され、そのほかの深い交わりのある方々も同様で、いやはや、どうしたらいいかとまどいました。

仍之三日過忌明二付、強而老侯二朝し申候所、又々悲哀甚敷、是二ハ度々迷惑御遠察可被下候。却而愚老不人情之態二も相見可申哉とこ満り申候。乍併此場尓て少しも痛ミ候得者、一藩中之愁ヲ生し候付、実ハ歯ヲくひしり者、落涙ハ不致候。情ハ見拙作候。

このため、三日過ぎた忌明けに、あえて鷹山公にお会いしまして、御報告を申し上げましたところ、またまた、とても悲しく哀れに思われて、これには、本当に、どうしたらいいのかとまどいました。御推察ください。かえって、わたしに思いやりがないよう受け取られたのではないかと、困りました。しかしながら、ここでわたしが、少しでも悲しむと、一国中に悲しい思いをさせてしまうので、実は、歯をくいしばって、涙をながさないようにしたのです。情のないことに見えたことでしょう。

一、三老を初諸有司之輯睦、見事成事不及申候。是尓て政事も行届キ申事と存候。莅大夫甚劇職中、文雅ヲ不廃面白く相見へ申候。竹大夫勿論中條も俗人ニあら須。常々面白く咄合申候。神保学問ヲ上ケ申候。督学、用人ヲ兼帯政談も多く此人ニ決し申候。片山紀兵衛文職ヲ転じ郡奉行ニ相成候。米澤尓てハ要務之職ニ御座候。

一、中条、竹俣、莅戸の三家老をはじめ、諸役人がやわらぎむつまじくしているのは、実に見事なものであることはいうまでもありません。これによって、政治も行き届いているのだとおもいます。莅戸家老は、非常に忙しい職務ですが、そんななかでも、詩文を作ったりすることをやめず、快く楽しく見えます。竹俣家老ももちろん、中条も、世俗の人ではありません。いつも、快く楽しく話し合っています。神保督学も学問を向上させております。興譲館督学（校長）と用人（藩主のそばに仕える役人）を兼ねておりまして、政治のことも、多くをこの人が決めております。片山紀兵衛は、学芸関係の職からはなれて、郡奉行になりました。米沢藩では重要な職務です。

御預り所之人民難取扱諸国一般ニ候所、此人郡奉行ニ相成候得ハ、志川て早縄も入用ニ無之、民心甚和ギ申候。人ヲ被用候事不堪感心候。

一、五十二日逗留、雪も降り申候付、是非ニ斷り十月廿八日米澤ヲ發し申候。當日老侯、駿河守殿、莅大夫ハ當主の命を以、又羽黒堂迄如前、郊送之儀衛儼然、新旧相知一統ニ送り申候而、一里餘南郊羽黒堂尓て別レ申候。老侯ヲ初一統之落涙御遠察可被成候。

担当するところの領民の取り扱いがむつかしいことは、どの国でも同じですが、この人が郡奉行になりましてからは、十手、早縄（ともに取り締まりの道具）も無用になり、領民の心情もやわらぎました。適材適所の人事に感心します。

一、五十二日間滞在して、雪も降り始めましたので、どうしても帰りますとお断りして、十月二十八日に米沢を発ちました。当日は、鷹山公、上杉勝定駿河守殿、莅戸家老は藩主の命を受けて、また羽黒堂まで、迎えのときと同じように、儀仗兵の行列を整えて、それから新旧の知り合いのみなさんが送りに来てくれまして、お城から一里ほど（およそ四キロ）南の郊外、羽黒堂にてお別れしました。鷹山公はじめ、一同涙を流しての別れでした。御推察ください。

神保ハ送り之役人ヲ引連レ、命を以板谷関迄送り申候。別離の態、御想像可被成候。生涯最早再遊ハ無之地、山川遼落、鎖魂言語同断御座候。

十一月九日東都ニ着キ申候。櫻田より迎使、千住迄罷出、一崖小館へハ大夫、中庶子両人待居申候。丁寧不及申候。僕も生涯の仕舞旅行、供廻りも本格の通りにて、馬も為引申候。少々俗吏の態ハを可しく御座候。

神保督学は、送りの役人を引き連れて、命令を受けて板谷関まで送ってくれました。この別れを、御想像ください。

生涯もうふたたび訪れることのない米沢。山や川は輝きを失ってしまい、魂はとざされてしまい、ことばでは言いつくすことができません。

十一月九日に江戸に着きました。桜田（上杉家の上屋敷）からは、迎えの使者が千住まで来ておりました。一崖（市谷）の家には、江戸家老と中庶子の二人が待ち受けておりました。御丁寧なこと、いうまでもありません。僕も生涯の仕舞旅行。旅の供廻りも本格のとおりで、馬も引き連れてのものでした。ちょっと、役人のようで、おかしかったです。

一、九日夜ニ入り帰着ニ付、翌朝市谷第ニ朝し申候。君上も早速奥座へ被召出候而寛々慰労、米沢物語ニ相成、一時計咄しヲ被聞候而、喜色不大方候。退出之時、諸老臣用座へ呼出し、又々同様ニて長物語り二相成、八ツ過第を出て、近邊官長廻勤い多し、暮ニ致帰宅候。門人群集八ツ比まて咄し申候。

一、九日の夜に到着しましたので、翌日に尾張侯のお屋敷に参上しました。藩主の宗睦公も、さっそく奥座へ召されまして、ゆったりと苦労をねぎらってくださり、米沢の物語になりました。一時（二時間）ばかり、話をお聞きになられまして、たいへんお喜びのごようすでした。退くときに、諸老臣から執務部屋へ呼ばれまして、またまた長話になりまして、八ツ（午後二時）過ぎに、御屋敷を出まして、それから、近辺の役所の長官のところへ報告にまわりまして、暮れに帰宅しました。門人が群れ集まってきており八ツ（午前二時）ころまで、話しをしました。

翌十一日朝、山田平次罷越、今日ハ當主御礼ニ市谷へ参上の序直ニ、高館へ被参筈と申聞候付、大キニ取込候而、彼是掃除申付候内ニ、儀衛儼然、米澤侯麻衣裳駕籠側ハ麻上下、ドロドロと御入来ニ候。

直ニ奥ノ小座敷へ請し申候。中々賓座尓ハ就間敷、愚老客座ニ就キ候様ニと、例之恭遜辞譲時ヲ移し甚こ満り申所、中庶士須田多仲、却而先生ヲ労し候事、如何御座候と申述候付、漸對座へ御上り有之候。

翌日の十日の朝。上杉家の山田平次がやってきまして、今日は、当主の治広公が市谷の尾張藩へ参上するついでに、こちらへもこられるはずですと伝えてきましたので、大騒動になって、あれこれ掃除を申しつけているうちに、行列をおごそかに整え、藩主の治広公は正装の麻衣装、駕籠そばの者は麻上下の礼服で、ドロドロとお越しになりました。

すぐに、奥の小座敷に案内しました。なかなか客座につかれず、わたしに客座につくようにいわれ、いつものように、慎み深くへりくだって譲られまして、譲り合いの時だけがすぎまして、困っておりますときに、中庶子の須田多仲が、「かえって、先生を困らせますので、お席に着かれては、いかがでしょうか」と、申し述べましたので、ようやく席に着かれました。

此度先生ヲ遠国へ招待之御礼、市谷へ今日申上候。随而直ニ罷出、御礼申上候との儀、辞謝反覆、丁寧痛入候。銀綿端匹酒肴、表座敷へ備へ、座ニ満チ申候。其内ニ家ノ鍛工へ被申付、刀脇指ニ口ヲ新ニ被為鋳候而、持参ニ御座候。目録は米沢侯御自身ニ被相渡候。是ハ先例越侯浜町へ御出の礼之通り ニ御座候。妻子嫁迄被召出、懇ニ慰労、各賜物有之候。塾長召出シ、目録ヲ給り候。

「このたび、先生を遠い米沢まで招待することのできたお礼を、今日市谷の尾張侯に申しあげました。それで、すぐこちらへまいりまして、お礼にまいりました」とのこと。辞退を何度も繰り返され、恐縮に存じました。粗末な酒のつまみを表座敷に整えて、座に着きました。そのうち、上杉家の刀鍛冶に申しつけられて刀脇差の二振を、新しく作られて、それを持参されました。その目録は治広公御自身が、手渡されました。これは、先年、越前守（鷹山公）が浜町の嚶鳴館へお越しになったときの礼と同じでございます。妻子と嫁まで呼び出されて、心を込めて、苦労をねぎらわれ、それぞれ品物をいただきました。塾長を召し出され、目録をいただきました。

随従両生　上田菱刈　も召出し謝辞有之候。
賜物ハ米澤尓て有之候。
何も供シ不申、吸物一ツ、御酒肴計尓て盃ヲ例之通進シ相済候。夫より甚悦喜尓て七ツ過迄物語有之、御帰り有之候。愚老ハ玄関式臺尓て達而辞謝ニ付、入り申候。駕ハ門中尓て被召候様ニと申候得共、承知無之、漸門の内シキミノホトリニテ、忰無理ニ請ひ候而上輿有之候。礼ニハ決而不参様ニ、急度御申聞ニ付、無據十四日ニ初而櫻田へ参り、盡日交歓飲宴罷歸り候。

随行したふたりの学生――上田、菱刈――も召し出され、感謝を述べられました。彼らは、お礼の品物を米沢でいただいております。

なにもお出しするものもなく、吸い物ひとつと酒のつまみだけで、さかづきを、いつものように交わしました。それから、はなはだお喜びになり、七ツ（午後四時）過ぎまで物語り、お帰りになりました。わたしは、玄関の式台でお送りをしました。お駕籠は、門の中で召されるようにと申しあげたのですが、承知をされず、ようやく門の敷居のところで、せがれ（平作）が無理にお願いをして、駕籠にのっていただきました。返礼には、決して来ないようにと申し聞かされましたので、やむを得ず、十四日にはじめて桜田の上屋敷へ行きまして、終日、交歓、酒宴をして帰りました。

市谷邸中ハ不及申、隣里を赫灼い多し、きのとくなる事ニ御座候。

山村伊勢守よりハ、家来ヲ遣し、急成事ニ候得ハ不都合ニ可有之候間、何尓ても手傳可申由ヲ申聞候。

一統珍敷可り申ニ付、世の儒教の季世ニ及申ヲ歎し申候。有間敷事ニも無之候。已ニ濱町小屋へも父侯ハ御出尓て有之候イキ。但し當侯志ヲ被継候事ハ感服い多し候。

市谷の藩邸内は言うに及ばず、近所も光輝かせてしまい、迷惑をかけて申し訳なく存じます。

山村伊勢守（尾張藩邸内の平洲邸の隣家）からは、家来を派遣してくださり、急なことであり、不都合なことがあれば、なんでもお手伝いをしますと言ってきてくださいました。

全体がめずらしがって、世の中の儒教の末期になったのではないかと、嘆いております。ないことではありません。すでに浜町の家には、父上の鷹山公がやってこられたことがあります。ただし、今の藩主の治広公が、その志を継がれたことには、深く関心致しました。

一、上田菱刈二生ハ仕合者二御座候。米澤にても客遇丁寧なる事二候。老侯宮中へ被召出目見有之、丁寧二慰労有之料理ヲ給り目録も玉り候。十日の暇ヲ与へ奥の松島へ遊覧為致候。然所、米澤ヲ離れ他領へ罷越候事、道中無心元由尓て、僕壱人給り、馬一匹ヲ被供候而、御馳走尓て松嶋ヲ見て帰り申候。此段ハ二生生涯二ハならぬ遊賞、東都館中之門人とも、甚ねたまし可り涎ヲ流し申候。

以上

一、上田、菱刈の学生は、幸せ者です。米沢でも客待遇のていねいなことででした。鷹山公の屋敷にも招かれまして、お目見えをいたしまして、ていねいに苦労をねぎらわれ、料理もいただき、目録もいただきました。十日の暇をあたえられて、奥州の松島へも遊覧させていただきました。それについては、米沢領を離れて他領へ出かけるにあたって、その道中が気がかりだからということで、下僕ひとりを付けられ、さらに馬一匹もそえられて、走り回って松島見物をしてきました。このことは、ふたりにとって、生涯にであうことのないことであり、江戸の嚶鳴館の門人らが、とてもねたましく思って、よだれをながしておりました。

以上。

此度の北行、前後之次第、記録シ置可申と存候　處、着後事ヲ了シ候而、散々風邪、十七八日平臥、ソリヤコソ旅疲なと醫師どもさ王き申候得共、何之苦もなく解熱、ソレヨリ漸々快復、飲食常ニ復シ、此節ハ全人ニ相成、年始も元朝　曉七ツより出仕、諸方廻勤も大方昨日切りニ濟し申候而、今日盤此書ヲ認メ申候。御安心可被下候。今年之御出府も無心元、又明年ニも可相成哉。扨々老心ハ是能ミ愁へ申候。世儀々々忍心哉と妻子共と、常々申暮候。

このたびの米沢行は、前後のことを記録しておこうと思っておりましたのですが、帰りました後始末をしましたあと、ひどいかぜをひきまして、十七八日間床に伏しておりました。「そりゃこそ、旅の疲れ」などと、医師どもがさわいでおりましたが、なんの苦も無く熱が下がりまして、それからすこしづつ回復しました。飲食も普通になり、今は完治しました。年始も元旦のあけがた七ツ（午前四時）から勤めに出かけまして、諸家への勤めも、ほとんど昨日までには済ませまして、きょうは、この手紙を認めております。御安心ください。あなたの今年の御出府も待ち遠しいのですが、また来年になってしまうのでしょうか。さてさて、老人の心としては、このことだけが気がかりです。世儀（樺島石梁のあざな）、世儀とじっとこらえる心かなと、妻子どもと、いつも話しております。

面語ニ代ヘテ此書ヲ認メ申候。書牘ニ可致と存付候へ共、ソレモ面当、足下許一見アレバスム事と、俗書ニテ申遣候。廣く他見は御無用、御口語ハ御勝手次第ニ御座候。

面談することができないので、この手紙を認めました。漢文にすべきと気づきましたが、それも面倒だし、あなただけが読んでくれれば済むことと、和文にしました。他の方にお見せになることは無用。お話しなさることは、お好きにしてください。

一、泉も甚よ王り申候得共、諸侯家礼遇甚厚く、去年忌明後日々他行、娘にこ満り申候。妻折々参り致看顧候。好婦も有之様ニ相聞へ申候。春の内ニハ継絃の積り二御座候。扨々老人是ニは氣ヲ痛メ申候。妻儀愚老同様ニ足下の東行を相待申候。春寒御自愛、令女育成之御手当可被成候。遣度物も有之候得共、扨々遠国、便りも不自由不任心底候。令内へも宜御申述可被下候。

一、泉（嚶鳴館の門人で、平洲の娘婿）も、たいへん弱っておりますが、諸侯家から講師として、礼をつくして厚くもてなされておりまして、去年、忌明け後は、毎日出かけておりまして、残された娘に困っております。わたしの妻が、おりおり出かけまして世話をしております。好き婦人もあるように聞いております。この春のうちには、後添えを迎えるつもりでございます。さてさて、老人としては、このことに心を痛めました。妻もわたし同様に、あなたが江戸に来られるのを待ち望んでおります。春寒、御自愛を。娘さんの成長に心をつくされますように。差し上げたい物もありますが、遠く離れたところで、便りも思うままにすることができません。奥様にもよろしくお伝えください。

一、巴太仲罷出随身、好書生二御座候。御安心可被下候。何事茂後便と草々御祝詞申納候。頓首。

正月四日　紀徳民

世儀樺賢契

梧右

猶々米澤にて保督学とは常々御噂、保生も西望い多し候。已上。

一、巴太仲（徳山藩儒官）が江戸へ出てきまして、嚶鳴館で学んでおります。好学生です。御安心くださいますように。なにごとも、後便にてと、早々にお祝いの言葉を申し納めます。

頓首。

正月四日　紀徳民

樺島世儀（石梁）賢に契る

梧右

追伸　米沢で藩校興譲館の神保督学といつもあなたの噂をしていました。神保君も西を望んでいましたよ（樺島世儀は築後国久留米藩士）。已上。

附録　跋

先師平洲先生国牘跋

平洲先生之学之徳之大、世尚有知与不知、我侯屈致之千里者三区々唯恐失其礼、且敝邑之事、一無可観者固矣而駛虚声乎大方君子、慚愧何勝、雖然先生之親我侯、亦豈常尋行路之人耶経年所者二十余、久矣哉先生曽有云、樺世儀助吾者也、信哉言也、一巻之国牘執而読之、一字一涙、使人慨焉、憶往日先生而有知、不亦咲泣九閲之上耶。

文化十五戊寅清明前一日七十六翁

神行簡拝

此ふみはこたひ遺草輯録のことを聞及びて、世儀男子述はるばるとうつしつかはしければ、ここに録し出すになむ

附録跋文【書き下し文】

平洲先生の学の徳の大なるや、世、尚知ると知らざると有り。我侯之を千里に屈致するは三、区々として唯其の礼を失することを恐る。且つ敝邑の事、一に観る可き者無く、固矣にして虚声を大方君子に騁せるは、慚愧すること何ぞ勝へん。然りと雖も先生の我侯に親しむや、亦豈に行路の人の常に尋ねん耶。年経る所は二十余、久しき哉。先生曽て云ふ有り、樺世儀は吾を助くる者なり、と。信なる哉言や。一巻の国牘、執りて之を読めば、一字一涙、人をして慨焉として往日を憶はしむ。先生知る有らば、亦九閲の上に咲泣せざらん耶。

文化十五戊寅清明前一日　七十六翁

神行簡拝

此ふミハこたひ遺草輯録のことを聞及ひて、世儀男子述はるばるとうつしつかハしければ、ここに録し出すになむ

附録　あとがき

亡き細井平洲先生の手紙へのあとがき

平洲先生の学徳の素晴らしいことについて、世の中にはまだ知られている事と知られていない事がある。

わが上杉鷹山公は先生を千里の道ほど遠く離れた江戸よりお迎えすること三度、ひたすら努力して、ただその礼を欠くことがないかを恐れていた。その上に我が米沢藩といえば、一つも見るべきものがなく、いやしいばかりであるのに、うわべだけの名声を立派な方や才徳のある人々にほしいままにしている。恥ずかしさをどうしてこらえることができようか。そうであっても、平洲先生はわが鷹山公に親しまれていたのだから、またどうして普通の旅行者の常の訪問であったと言えるであろうか。年月の過ぎ去ること、二十年あまり、ずいぶんと久しくなってしまった。先生は以前に言っていたことがある。樺世儀は私を助ける者である、と。真実であった、その言葉は。この一巻の手紙をじっと手に取って読めば、一字読むごとに一筋の涙が流れ、読む人の心を揺さぶって、過ぎ去った日々を思い出させる。先生がこのことを知ったならば、またはてしない空の上で喜んで笑ったり、涙を流して泣いたりすることであろう。

文化十五年戊寅（元年・一八一八）清明（三月上旬）前一日

七十六翁　神（じん）（神保（じんぼ））行簡（ぎょうかん）（綱忠（つなただ））拝

この手紙は、この度遺草に集録されるとのことを聞き及んで、樺島世儀（石梁）が編集してはるばると写して送ってきたので、ここに書き記すものである。

跋

君子平洲先生国字遺書、存篋笥者若干巻所応于諸侯及諸子需者十居七八焉、辞世已久矣、人或借去、間有散逸、余毎憂之会旧門生来集、語次及之、僉曰、隻字拱璧、不可不重、仮令借者愛護、亦恐転写之誤、胎瑕於夫子、不可知也、私刊而眎之何如、余甚然之於是有斯挙匪敢公諸世也

天保乙未歳仲春

男　徳昌謹識

門人西條　上田節書

跋【書き下し文】

先君子、平洲先生国字遺書、篋笥に在る者若干巻、諸侯及び諸子需に応ずる所の者十に居ること七八。世を辞して已に久しきや、人或ひは借りて去り、間ま散逸する有り。余毎に之を憂ふ。会たま旧門生来たり集ひて、語次之に及ぶ。僉に曰く、隻字拱璧を重ねざる可からず。仮令借者愛護するといえども、亦転写の誤りを恐る。瑕を夫子に貽すは、知る可からざるなり。私刊して之を眎すこと何如、と。余甚だ之を然りとす。是に於ひて斯の挙有るは、敢へて諸を世に公にするに匪ざるなり。

天保乙未歳仲春　男徳昌謹しんで識す

門人西條　上田節書す

跋（あとがき）

亡くなられた父、平洲先生の和文の書き残されたものが、箪笥（たんす）にいくつかあった。諸侯や門下生に答えたものが、十のうち七八を占めていた。先生が世を去ってすでに久しく、借りたまま去って行ってしまった人もいて、その間に散逸してしまうものがあった。私はいつもこのことを思い悩んでいた。

たまたま古い門人が来て集まった時、話のついでに、そのことに及んだ。皆が口々に言った。文字が欠けたり玉を抱え込んだりする（本を持ち出して抱え込む）ようなことを、もうさせてはいけない。たとえ借りた者が、大切に護（まも）ったとしても、また書き写して誤りが生じることが恐ろしい。先生に瑕（きず）がついてしまうのを知らんぷりなどできない。あなたが個人的に出版したら良いのではないか、等々。

わたしはこれらをもっともな事だと思った。そこでこのような事（『嚶鳴館遺草』の出版）を企てたが、これはむやみに平洲先生の国字遺書を世の中に公にしようとするものではないのである。

天保六年（一八三五）春半ば（仲春・二月）

息子徳昌（とくしょうつつし）謹んで識（しる）す

門人西條（もんじんさいじょう）（藩士（はんし））　上田節（うえだせつ）（雄次郎（ゆうじろう）・子成（しせい））書きしるす

細井徳昌（一七八七～一八四五）は平洲養子、本姓宇野氏。字世克、号中台、俗称清三郎など。